

私のミーコ

一年 杉山実優

三つの黒い小さな丸が私をみています。我が家の愛犬チワワのミーコ。

私がミーコと出会ったのは、令和二年四月二十二日水曜日でした。その頃は新型コロナウイルスがはやっており、家にずっと引きこもっていた毎日でした。そんな時、母が少しでも家の中が明るくなるようにと、犬を飼うことに決めたのです。インターネットで保護犬を扱っている団体のホームページから、かわいいチワワを見つけました。最初に会ったときは他の犬たちと保護されていたミーコは、今のなつっこいミーコとは違い、私や母をみて警戒して吠えていました。そしてすごくやせ細っていました。

私の家に来たときミーコはやはり不安だったのでしよう。自分がどこにいればいいのか分からなかったでしょう。ずっと家の中をうろちよろしていました。けれどミーコは私をみて、安心したのか、私のひざの上でねむりはじめました。その時のミーコはあまりにも可愛く私はそっとミーコをなでました。

保護犬とは、ブリーダーのところでは仕事を終えた犬や猫、家族から飼育放棄されてしまった犬や猫のことをいいます。いまだに進んでいる殺処分問題。保健所につれていかれた犬や猫たちに新たな飼い主が現れない限り、何の罪もない動物が殺されてしまいます。これらの原因をつくるのは人間です。

犬を家族のように可愛がっている飼い犬には、「ずっとその犬を幸せにする」という責任があります。今はコロナウイルスがはやっているため、犬や猫を飼う人たちが増えているそうです。けれど途中で「やっぱり無理」といって簡単に犬を捨てる人も少なくありません。私が思う責任とは、犬も家族のように大切にすること。私が思う愛とは、毎日の散歩やおもちゃで遊んであげることなど犬にとっての幸せを人間が理解してあげることだと思います。

人の幸せは自分で叶えられるものが多いけど犬の幸せは、飼い主にあずけられていて人間が責任もってつくってあげるべきだと私は思いました。

私の願いは、人間が犬や猫の気持ちを理解して、お互いに平和で幸せに暮らしていけるような世界になってほしいです。

「ミーコ」と呼ぶとすぐにかかけつけ黒いまんまるの目で私をみます。しっぽはいつも上がっています。「私を選んでくれてありがとう。」三つの黒い小さな丸がそういった気がしました。